

2020年4月19日 礼拝説教要旨  
詩編講解説教11「主は避けどころ」  
詩編11:1~7、ローマ5:1~5

第11編は「信頼の歌」です。この詩人は明らかに苦境に立たされています。ダビデの立場で考えるならば、サウルから追われ八方塞がり、もう逃げ場がないという状態です。更にそこに追い討ちをかけるように「あなたたち」(1節)という存在が出てきて「鳥のように山へ逃れよ」(1節)と言います。これはわたしたちを神さまから引き離す存在、神さまへの信頼をやめさせようとする力、サタンと言ってもいいでしょうけれども、そういう自分自身の心の中に響いてくる誘惑の声と葛藤している様子が伺えます。

しかしその時に詩人は言うのです。「主を、わたしは避けどころとしている」(1節)原文に則して訳すなら、「主の中にわたしは逃げ込む」となります。主のもとに逃げ込む。4節には「主は聖なる宮にいます」とありますから、これはわたしたちのことに置き換えて言えば教会において神さまを礼拝すること。そこに逃げ込むということでしょう。ある人はそれは現実逃避と言うかもしれません。でも果たしてそうでしょうか。礼拝は現実逃避でしょうか。はたまた神さまを信じることもそれは現実逃避だと言われる。しばしば苦境に立たされた時にわたしたちは「もう神さまに祈るしかない」「委ねるしかない」ということを言います。それは逃げているということでしょうか。

今日のところにもう一つ逃げる表現があります。「鳥のように山へ逃れよ」(1節)この「逃れよ」は「さまよう」という意味があります。当てもなくさまよう。困難が待ち構え、攻撃を仕掛けてくる中で当てもなく飛び回り山へ逃げていく様です。なぜそのように逃げていくのか。「世の秩序が覆っている」からです。「世の秩序」とはこの世の正義であり、知恵であり、経済、武力、そういうものがそれに当たるでしょう。それが覆っている。もはや破綻している。それゆえにまた確かなもの、別の「山」を探し求めて当てもなくさまよい飛び回る。それがわたしたちの現実なのかもしれません。そしてそれはまさに今の世の中の状態ではないでしょうか。

コロナウイルスの感染拡大はとどまるどころを知りません。その中であらゆるものが停止を余儀なくされています。教育も経済活動も。政治もまた混沌としています。山に向かって逃げて、そこには頼りになるものがない。それでもサタンは言うのです。「鳥のように山へ逃れよ」神さまから離れてこの世の秩序に頼れ。そこに逃げよと誘惑するのです。教会も試みを受けています。一見、教会も活動が停止しているように見えるかもしれません。すでにこれまでしてきたことができない状況にあります。わたしたちは今サタンの試みにあります。「主に従う人に何ができようか」「鳥のように山へ逃れよ」神さまを信頼することをやめて、別のものに逃げたらどうだ。そういう誘惑を受けているのです。

14世紀の中頃、アジアからヨーロッパ全土を襲った黒死病(ペスト)は、ヨーロッパの全人口の4分の1から3分の1を死に至らしめたと言われています。その後も散発的に流行を繰り返したこの病は、1527年の夏、マルティン・ルターがいたヴィッテンベルクをも襲いました。時の領主はルターたちに避難を命じますが、ルターはこれを拒否して町の病人や教会員たちをケアするために残ります。しかし、他の町をも襲った災禍の中で、

キリスト者が災禍を避けて逃れることは是か非かとの議論が起こり、ルターにアドバイスを求めることになって「死の災禍から逃れるべきか」という文章が残っています。

その文章の中で、ルターは牧師たちに対して、命の危険にさらされている時こそ、聖職者たちは安易に持ち場を離れるべきではないと戒めます。説教者や牧師など、霊的な奉仕に関わる人々は、死の危険にあっても堅く留まらねばならない。私たちには、キリストからの明白な御命令があるのです。「良い羊飼いは羊のために命を捨てるが、雇い人は狼が来るのを見ると逃げる」(ヨハネ10：11)と。人々が困難にある時に最も必要とするのは、御言葉と礼典によって強め慰め、信仰によって死に打ち勝たせる霊的奉仕なのです。

主のもとに逃れることは現実逃避ではありません。この世に踏みとどまり、そこで神さまの御業を行うために主のもとに逃れるのです。そこでこそこのようなあらゆる試みに打ち勝つのです。だからわたしたちはどのような形であれ礼拝をやめません。それぞれの家庭で礼拝してください。そこに逃れてください。「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」(ネヘミヤ8：10)という御言葉を今こそ聞きましょう。